

琉球大学学術リポジトリ

琉球大学における教職大学院・教育学修士課程新入
院生の入学目的の一考察：
新入院生への質問紙調査から

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2017-05-12 キーワード (Ja): 教職大学院, 修学目的 キーワード (En): 作成者: 比嘉, 俊, 川上, 一, 森, 力 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36599

琉球大学における教職大学院・教育学修士課程新入院生の入学目的の一考察

—新入院生への質問紙調査から—

比嘉 俊・川上 一・森 力

A Study on Object of Going on Professional School for Teacher Education,
Master of Education at University of the Ryukyus
: Based on A Survey of Question Paper for New Students

Takashi HIGA, Hajime KAWAKAMI, Chikara MORI

琉球大学大学院教育学研究科
高度教職実践専攻(教職大学院)紀要
第 1 卷

Department of Teacher Education
Graduate School of Education
University of the Ryukyus
No. 1

2017年3月

【実践研究】

琉球大学における教職大学院・教育学修士課程新入院生の入学目的の一考察

—新入院生への質問紙調査から—

比嘉 俊¹・川上 一¹・森 力¹

A Study on Object of Going on Professional School for Teacher Education,
Master of Education at University of the Ryukyus
: Based on Survey of Question Paper for New Students

Takashi HIGA¹, Hajime KAWAKAMI¹, Chikara MORI¹

要 約

国立大学法人琉球大学は2016年4月に教職大学院を開院したことにより、教育学研究科には従来の修士課程と合わせて二課程の大学院を持っている。これらの大学院への新入院生は、彼ら彼女らの目的に応じて教職大学院と修士課程の課程を選択していると思われる。そこで、両課程の2016年4月入学の院生へ大学院進学への動機などを調査し、その相違を検討した。教職大学院入学生は大学院へ「教員としての実践力」を望んでおり、修士課程の方は「学術的研究」を求めている。両課程に共通している部分としては、両課程の現職教員は大学院に学術的な科目内容を期待している。この理由として、教育現場では、学術的な研鑽を積む時間やその人材に触れる機会がかなり少ないと考える。両課程の院生の入学目的に違いがあることから、今後、琉球大学は院生の志望動機に応じた科目の提供などの地域への貢献が求められる。

キーワード：教職大学院 修学目的

1. はじめに

文部科学省(2006)は、中央教育審議会(答申)「今後の教員養成・免許更新の在り方について」(2006年7月11日)において、近年の社会変動が大きくなる中で、より高度な専門的職業能力を備えた人材が求められ、教育分野でも教員養成に特化した教職大学院制度を創設する必要性を掲げている。さらにこの答申の中で、社会の変化や諸課題に対応し得るより高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた新人教員とスクールリーダーの養成を教職大学院の意義としている。

現に沖縄でも、歴史的・社会的・文化的背景からくる固有の公教育課題が多く存在する¹⁾。例えば、学力の低さや生活習慣の確立が困難な家庭の多さなどがあげられる。このような沖縄固有の課題に対して自律的・弾力的に取り組める教員の育成が教員養成大学に求められ、国立大学法人琉球大学(以下本学)は2016年4月に大学院教育学研究科専門職学位課程(以下 教職大学院)を開院した。琉球大学(2015)が文部科学省に提出した教職大学院の「計画書」によると、設置目的として「沖縄県における教育の諸課題に対して、問題や課題を自ら捉え、深め、解決策を策定し、行動を起こし、その結果を振り返り、次の思考や行動につなげる力としての『合理的・反省的思考力』を中核とした高度な専門性と実践的指導力を備えた教員養成を目的としている。」と記載されている。これらは先の沖縄の教育における課題に対応するかたちとなっており、教職員人材育成から地域の教育課題解決に向けた本学の意向が読み取れる。

¹ 琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻

本学は教職大学院の開院により、地域の教育課題への一助を目指しているが、教職大学院への入学者はどのような意識を持っているのだろうか。教職大学院入学者の意識調査として、飯田陸央 他(2013)が先行研究としてあげられる。飯田陸央 他は全国19の教職大学院の院生535名へアンケート調査を実施し、入学の目的の1位は「専門的な知識・技術を得るため」、2位が「幅広い視野や知識・教養を得るため」との結果を報告している。この研究では学部新卒者についての考察に紙幅を割いており、教職員採用への有利性や給与の増加など学部新卒者の教職大学院修了メリットへの期待感が述べられている。教職大学院には現職教員と学部新卒者の院生が混在しており、この研究では現職教員へのアンケート結果の報告はあるが、現職教員への考察は行われていない。ここで、現職教員が教職大学院に求めているものや入学目的をもっと調査する必要があると考える。さらに、現職教員と学部新卒者との間には意識や目的に違いはあるのだろうか。加えて、本学には教職大学院と並列して教育学研究科修士課程(以下修士課程)も存在する。教職大学院生と修士課程院生の間にも意識の相違が存在するのだろうか。大学院に進学する者には、何らかの目的や期待感を持って進学すると思われる。これらの目的や期待感を調査し、比較することにより、教職大学院入学者が持っている目的意識を把握することが、今年度開院した本学の教職大学院の運営の方向づけに寄与できると考える。

2. 目的と方法

本研究は、2016年度入学の教職大学院生と修士課程院生の入学の目的や大学院への期待を質問紙にて調査する。調査の結果を「教職大学院生」と「修士課程院生」、「現職教員」と「学部新卒者」に分け、大学院課程の違いや所属(現職教員/学部新卒者)の違いによる意識の差があるかを確認する。

研究の方法は、本学の教職大学院1年生、教育学修士課程1年生両者の必須授業でアンケートを配布し、1週間後に回収する。アンケートの内容は、

質問1「大学院修士課程でなく、教職大学院を受験した理由を書いてください」(課程選択の理由)

質問2「教職大学院に期待することは何ですか」(大学院への期待)

質問3「教職大学院でやってみたい(頑張りたい)ことは何ですか」(大学院でやってみたいこと)

質問4「2年後(院終了後)に、あなたは何を得たと予想されますか。下記から上位3つを選び、○をつけてください」(終了後に得るもの)、選択肢:「これから一緒にやっていく仲間」「学級経営の力」「教科経営の力」「学術的研究能力」「学位」「子ども理解力」「教育への視野の広がり」「学校運営へ参加する力」「その他」の中から3つを新入院生に選択させた。併せて、「学部からの入学」「現職教員」「教員以外の就業者」「その他」

質問5「教員をやりたい度(MAX100)を数値で表してください」とした。

上記の質問紙調査の結果を「教職大学院」と「修士課程」、「現職教員」と「学部新卒者」で分類し、カウントした。また、質問紙には学籍番号と氏名を書く欄はあるが無記名を可とした。

3. 結果

教職大学院生、修士課程院生の両者の入学目的または、意識調査のために院生へのアンケート依頼は、入学して少し落ち着いたころの4月下旬に行った。教職大学院生には2016年4月19日に質問紙を配布し、翌週の4月26日に回収した。また、修士課程院生には2016年4月26日に配布し、5月10日の回収となった。修士課程では、配布の翌週の講義が祝日により休校のため、2週間後の回収となった。回収数は以下の通りとなった(表1)。

表1 アンケート回収数

教職大学院			修士課程		
現職教員	学部新卒者	その他	現職教員	学部新卒者	その他
10	3	1	4	8	2

本学の教職大学院の定員数は14人となっており、教職大学院の質問紙回答者には現場教員が多く(10人)、学部新卒者が3人いた。院生に占める現職教員の割合の高さが、教職大学院の特徴である。教職大学院の現職教員以外(4人)のうち本学の卒業生は1人で、3人は他大学の卒業生であった。教職大学院のその他は、学部卒業後看護師として就職し、今後養護教諭を目指す院生であった。

他方、修士課程の定員は18人で、質問紙回答者は、現職教員4人、学部新卒者8人であった。その他は教員として臨時的任用後大学院への進学者と他職種の就業者の2人となった。ここでの他職種就業者については、どのような職種なのかの調査は行っていない。

(1) 進学理由

本学の教育学研究科には、教職大学院と修士課程の二課程ある。新入院生はこれらの二課程から自分の目的に合った課程を選択し、進学している。そこで、新入院生に教職大学院または修士課程を選択した理由を質問した。上記のとおり回収数は合計28と少ないので、すべての理由を以下に記す(表2)。括弧内の数字は、同様な回答内容の合計人数となる。また、進学理由を複数の要素で述べている回答については、その複数の要素に分けて記載している。

表2 課程選択の理由

教 職 大 学 院	現職教員	2-1 実践的な指導力につながると思った(5)
		2-2 沖縄県の教育課題解決の方向性を見出すため(3)
		2-3 学校全般について学びたいと思った(2)
		2-4 教職大学院では、校種間や他教師などとの交流が重要となるから(2)
		2-5 学校で「組織で仕事をする」ために何が必要か考えるきっかけになると思った
		2-6 教職の中間地点に当たるタイミングだったので、学び直したいと思った
		2-7 これから(中略)〇〇主任という役割を受けることが予想されるので、研究ではなく、学校現場で生かせることを学びなおすため
		2-8 自分の指導力を見直したいと思った
	学部新卒者	2-9 現場での実習が中心となっているため、現場に出る前に経験を積むことができる
		2-10 沖縄の教育について現場を知ることができる
		2-11 保健学研究科では、現職の先生や教師を目指すものが少なく、刺激が足りないと思った
		2-12 教職について幅広く、学びと実践が行えると思った
その他	2-13 高度な知識や実践力を学ぶことができると思った	
	2-14 自信を持って、現場に行きたかった	
修 士 課 程	現職教員	2-15 より専門的に研究に取り組んでみたいと思った(4)
		2-16 研究テーマに基づいた実践を修士論文という形でまとめた
	学部新卒者	2-17 教科を中心に専門的に勉強したかった(5)
		2-18 (専門を)研究して自信をもって、生徒の前に立ちたいから
		2-19 学部からお世話になっている先生方のもとで学びたかった
		2-20 先輩もいるので
	その他	2-21 より専門的な知識を身につけたい
2-22 研究をしたい、論文を書きたい		
2-23 教員ではないから		

教職大学院生は教育現場での実践力を培うこと（13人）や沖縄県の教育課題の解決を目指して（4人）教職大学院を選択した（表2）。修士課程では、専門的な知識や論文などの研究を求めている進学となっている（13人、表2）。教職大学院、修士課程にそれぞれ一人のみであったが、現職教員ではない院生が教師として学校現場に出る前に「自信を持ちたかった」との回答もあった。また、表には記載していないが、修士課程の学部新卒者の中には「特になし」との回答もあった。

(2) 大学院に期待すること

新入院生は入学後2年間、それぞれの目的に沿った学修を進めていく。この学修には、院生個人の努力が不可欠であるが、大学院側からの科目提供や大学教員による指導、ハード面での支援なども重要になってくる。そこで、新入院生へ大学院に何を期待するのかを質問した。その結果を下記の表にする（表3）。ここでも、括弧内の数値は合計数とし、複数の要素で述べている回答においては、要素を分けて記載している。

表3 大学院への期待

教職大学院	現職教員	3-1 理論と最新の研究の紹介（3） 3-2 （学校の外からの）様々な意見を聞きたい（2）〔前括弧内は筆者による〕 3-3 他校種との交流で情報交換（2） 3-4 理論とこれまでの実践とのリンク（2） 3-5 現場とつながる研究 3-6 思考を刺激する 3-7 専門的な知識や指導を具体的に聞きたい 3-8 現場に戻って（中略）生かせるような知識・スキルの習得 3-9 沖縄の教育課題改善に向けての先行実践や成果の見えている学校の紹介 3-10 （院生）2年目の研修日の調整〔括弧内は筆者による〕
	学部新卒者	3-11 教育実践力の指導（2） 3-12 勉強のできる環境 3-13 沖縄の教育課題を解決できるような指導
	その他	3-14 学部卒院生の枠がもう少しあってもよいと思います
	現職教員	3-15 理論を中心に学びたい（2） 3-16 実践と理論の結びつき 3-17 （教育の）諸問題について大学院という視点からその改善策の構築を探求できる場であって欲しい〔括弧内は筆者による〕 3-18 各領域の専門の先生方に指導して頂けること 3-19 多校種や多教科の大学院生と交流したり、情報交換ができる
修士課程	学部新卒者	3-20 教育学の理論の構築（2） 3-21 自分がやりたいように調整できる 3-22 専門的な知識や技能を身につけるための経験をする時間や場面 3-23 研究のノウハウをしっかりと獲得できるよう指導していただきたい 3-24 院生の中に、現職教職の方もおられたので、現場の状況、体験などをきき学んでいきたい 3-25 専門の授業等に期待しています 3-26 教師としての資質向上に関する教育、講義、実習 3-27 学部よりも幅のある授業 3-28 コミュニケーション能力 3-29 教育についての知識・考え方
	その他	3-30 より専門的な教養を身につけられる講義と現場で教える為のテクニック 3-31 論文指導 3-32 教員とのつながり

教職大学院，修士課程の両課程に同程度期待されているのは，他院生との交流から自分の視野を広げることであった（教職大学院2人，修士課程3人）。他院生との交流に期待をよせている新入院生は，教職大学院では現職教員のみであった。他方，修士課程では現職教員，学部新卒者，その他それぞれ1人ずつであった。

この質問項目でも課程選択理由と同様な傾向にあり，教職大学院生では教育実践力向上に関連したことに期待をしている院生が9人いた。他方，修士課程では教育研究の技量向上に関連した回答が14人あった。

(3) 大学院でやってみたい（頑張りたい）こと

新入院生は大学院に入学し，本人なりにやってみたい（頑張りたい）ことがあると推察される。これまでの質問（課程選択理由，大学院への期待）と似たような質問になるが，大学院で何をやってみたい（頑張りたい）かを質問した。その回答を下記にあげる（表4）。ここでも，回答の要素が複数である場合には，複数の要素に分けて記載している。

表4 大学院でやってみたい（頑張りたい）こと

教 職 大 学 院	現職教員	4-1	様々な校種の先生方の話しから学ぶ（3）
		4-2	教育課題を解決する力を身につけたい（3）
		4-3	教育学の知識を深める（2）
		4-4	教材研究と授業づくり（2）
		4-5	これまでの実践を振り返る（2）
		4-6	教育観を整え，確立したい
		4-7	新しい自分をつくる
		4-8	現場にいたら，できないことをやってみたい
		4-9	文献を読みまくる
		4-10	研究成果に汎用性を持たせたい
学 部 新 卒 者	4-11	現職院生の授業を見学したい（2）	
	4-12	実習で色々やってみたい	
その他	4-13	大学院生活を頑張っていきたい	
修 士 課 程	現職教員	4-14	教育を理論的に研究する（2）
		4-15	大学の英語の授業をみてみたい
		4-16	学習心理学や認知心理学について学ぶ
		4-17	実践的指導力を培う
	学 部 新 卒 者	4-18	授業研究（2）
		4-19	専門分野での深い理解（2）
		4-20	子どもの思考力の育成
		4-21	研究機関で行われる実験がどのように教育につながるのか考察
		4-22	教師になったとき，生徒とたくさん話をしたりアドバイスできるようにいろいろな事を経験したい
		4-23	研究をして他大学で発表
		4-24	教師としての資質向上
		4-25	論文
		4-26	教員採用試験
		4-27	人前で話す力
		4-28	教育学に関する全般的な理解
	その他	4-29	知識を児童生徒にも分かりやすく伝える為の指導の工夫
		4-30	研究論文作成

大学院でやってみたいことは，教職大学院の現職教員は多様な回答になっているが，学部新卒者は現場を意識した回答になっている（「授業を見学したい」「実習で色々やってみたい」）。修士課程

の現職教員は射程の狭い専門的領域に挑戦したいとの回答が多く(80.0%)、学部新卒者では専門領域から教育現場での実践力までと多岐にわたっている。

(4) 2年後に得ているもの

新入院生に大学院修了時に、自分が得ていそうなものを「これから一緒にやっていく仲間」「学級経営の力」「教科経営の力」「学術的研究能力」「学位」「子ども理解力」「教育への視野の広がり」「学校運営へ参加する力」「その他」の中から3つ選択してもらった。その項目を選択した人数を下の表8にした。ここで、修士課程の現職教員一人が5つの選択肢を選んでいった。この現職教員は結果の数字に含んでいない。また、教職大学院、修士課程の学部新卒者のそれぞれ一人が選択を2つにしていた。このケースは、選択した2つを結果に盛り込んだ。

表5 大学院で2年後に得るもの

課程	教職大学院			修士課程		
	現職教員	学部新卒者	その他	現職教員	学部新卒者	その他
仲間	1	2	1	0	0	0
学級経営力	4	0	0	0	1	0
教科経営力	4	0	0	2	6	0
学術的研究能力	1	0	0	3	5	2
学位	1	0	0	0	2	0
子ども理解力	4	1	1	1	3	1
教育への視野	7	3	1	3	6	2
学校運営力	6	2	0	0	0	0
その他	2	0	0	0	0	1

教職大学院で選択が多かったのは「教育への視野の広がり」と「学校運営へ参加する力」であった。修士課程では「教育への視野の広がり」「教科経営の力」「学術的研究能力」が高い頻度で選択されていた(表5)。教職大学院でのその他は「組織のつながりを重視する意識や考え」「研究理論に裏打ちされた実践を進める力」となっており、修士課程では「学校の問題の明確な理解」となっていた。

(5) 教職への希望度

両院生へ教職への希望度を調査した。教職への希望度を0-100の間の数値で表現してもらった。この数値は、非現職教員は将来教職に就きたい希望を表し、現職教員にとっては今後教職を続けたい気持ちがある程度表していると考えられる。回答された数値を下に記する(表6)。

表6 教職への希望度

課程	教職大学院			修士課程		
	現職教員	学部新卒者	その他	現職教員	学部新卒者	その他
教職希望度	100	100	100	100	100	90
	90	80		50	100	0
	90	80		無回答	100	
	90			無回答	100	
	90				80	
	86				60	
	80				60	
	75				50	
	70					
	無回答					
教職希望度(平均)	85.7	86.7	100.0	75.0	81.2	45.0

無回答が教職大学院の現職教員で1人、修士課程の現職教員で2人いた。この無回答を除くと、教職への希望度は全般的に高かった。教職大学院においては、希望度80以上が84.6%にのぼっていた。修士課程の学部新卒者では半数が希望度100としていた(表6)。

4. 考察

考察において、各質問への新入院生への回答を「学術的要素」「教育実践力」「教育課題への対応」「他院生との交流」「教育現場理解」「その他」にカテゴライズし、課程や所属の違いで考察を進める。各カテゴリーの説明を次の表で行う(表7)。また、所属が学部新卒者とその他(教員外職種など)を非現職教員として一括りにする。

表7 院生回答のカテゴリー

学術的要素	特定されたある領域をターゲットとした専門的な研究や知識の学修をねらいとしている 例：より専門的に研究に取り組んでみたい (2-15)
教育実践力	教職員として、教育現場で発揮できる力をねらいとしている 例：実践的な指導力につながる (2-1)
教育課題への対応	教育現場での課題を踏まえて、この課題に対応できる力をねらいとしている 例：沖縄県の教育課題解決の方向性を見出すため (2-2)
他院生との交流	他の院生との交流を通して、自己の知見を高める 例：多校種や多教科の大学院生と交流したり、情報交換ができる (3-19)
その他	上記四つのカテゴリーに該当しないもの 例：新しい自分をつくる (4-7)

(1) 課程選択の理由

カテゴリー別に新入院生の教育学研究科の課程選択の理由をみてみると、修士課程では殆どが学術的要素を選択理由としている(表8)。他方、教職大学院は実践力を理由にあげているのが多い(表8)。

本学が社会へ発信しているHPのオフィシャルサイトで、修士課程は人材養成のキーワードとして「学識」「見識」「専門性」「深い理解」を掲載しており²⁾、学術的知見を備えた人材の養成を目的としている。一方の教職大学院のサイトには、理論と実践の融合、合理的・反省的に問題解決ができる人材の育成を目指している³⁾。このことは、教育現場における課題解決に向けた実践力の人材養成を教職大学院のねらいとしており、「琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻設置計画に係る補正計画書」にも明記されている。このような大学側の両課程設置の目的を受けて、新入院生は課程の選択を行った。その結果、教職大学院は教育実践力が課程選択の理由として多くなり、修士課程は学術的要素が選択理由として多い。新入院生は自分の目的に応じて、妥当な課程選択をしている。

(2) 大学院に期待すること

大学院への期待に関しては、教職大学院、修士課程とも学術的要素が一番多い。大学院にて学術的要素を学びたいという院生の期待は、先述した飯田 他の研究結果と同じである。また、看護職であるが澤田由美 他(2012)の研究でも、現職看護師の大学院進学動機のトップとして「専門領域での

表8 課程選択理由

	教職大学院		修士課程	
	現職	非現職	現職	非現職
学術的要素	0	0	5	7
実践力	9	5	0	1
課題への対応	3	0	0	0
院生との交流	2	0	0	0
その他	2	1	0	3

学修」となっており、この結果も
 本学の院生の大学院への期待と
 一致している。

教職であれ看護職であれその
 職には、職場での研修がある。こ
 の研修と大学院への期待は関連
 があるように思われる。現職にお
 いて研修を受け、そこで足りない

部分を大学院に期待しているのではないだろうか。間瀬正次(1997)は現職教員の校外研修機関を文
 部省(現 文部科学省)・教育委員会・民間教育団体・大学・教育研究所に分類している。これらの研
 修機関では教育の動向や教科指導法を取り扱っていることが多いと予想される。これらは、カテゴ
 リーに入れると「実践力」と「課題への対応」である。このような状況だと、現職教員は学術的要素
 を現職の研修として受ける機会が少なく、大学院には学術的要素を期待し、自分のキャリア形成に
 活かそうとしていると考えられる。

(3) 大学院でやってみたい(頑張りたい)こと

大学院でやってみたい(頑張りたい)ことは、大学院の課程選択理由と同様となっており、教職大
 学院では実践力が多く、修士課程
 では学術的要素が多い(表10)。こ
 の数値には、課程選択の際の動機
 となっている部分を大学院にお
 いて精進または研鑽したいとの
 新入院生の志がうかがえる。

表10 大学院でやってみたい(頑張りたい)こと

	教職大学院		修士課程	
	現職	非現職	現職	非現職
学術的要素	4	0	4	7
実践力	4	3	1	6
課題への対応	3	0	0	0
院生との交流	3	0	0	0
その他	3	1	0	2

(4) 2年後に得ているもの

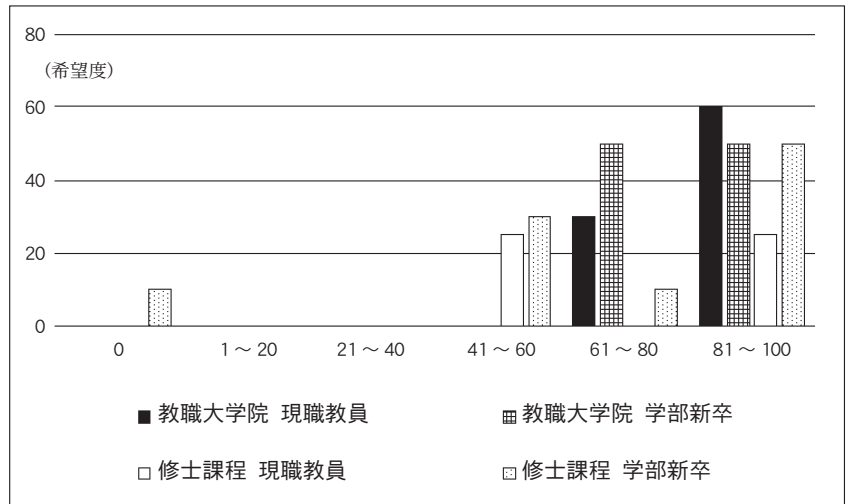
表8から理解できるように、2年後に得ているものは教職大学院、修士課程ともに一番多かった
 のは「教育への視野」であった。新入院生は大学院で2年間学修することにより、教育への知見が高
 まると考えている。二番目と三番目に多いものは教職大学院と修士課程では異なった。教職大学院
 では「学校運営力」「子ども理解」であった。この結果は教職員として、教科・学級・学年などの総合
 的な経営力が2年後には身につけていると教職大学院生は想定している。他方の修士課程は「学術
 的研究能力」「教科経営力」の順となっていた。修士課程のこの二つは教科指導のスペシャリストに
 通ずるところがある。修士課程の新入院生は、大学院にて教科内容を深めることができるようにな
 ると考えている。この両者の二番目・三番目の項目も課程選択理由とかなり似通っている。

(5) 教職への希望度

表6で新入院生への教職への希望を数値で表した。この結果を希望度0, 希望度1-20, 希望度
 21-40, 希望度41-60, 希望度61-80, 希望度81-100の階層に分け、この階層を所属の何%が占め
 ているかをグラフにすると、次のようなグラフになった(グラフ1)。

大学院教育学研究科だけあって全体的に教職への希望度は高い。その中でも、教職大学院は無回
 答(1人)を除いては全員が希望度61以上である。また、教職大学院、修士課程の両方の非現職の教
 職への希望度は高めである。非現職は学士の延長として大学院教育学研究科に在籍し、課程終了後
 には教職を目指す院生の割合が高いと思われる。修士課程で学部新卒者の希望度60以下が存在する
 のは、修士課程で学術的な知見を得ても、教職に就く(または続ける)のを躊躇している院生がいる
 ことも理解できる。換言すれば、修士課程の院生は教職に就くことを最終目標としているのではな
 く、学術的な知見を高めるために大学院へ進学している者もいると考える。

今回の調査で、教職への希望度では気になる回答もあった。それは、教職希望度調査での無回答はすべて現職教員であった。この回答を考察するための材料は現在揃ってなく、憶測の域を出ることはないので、考察はできない。また、母集団は極めて少ないが、修士課程の現職教員の5割(2人)が無回答としている。これらの無回答は教職という職業の何かを物語っていると窺える。



グラフ1 所属に占める教職希望度 (%)

(6) 現職教員と非現職教員

各質問において、教職大学院と修士課程といった課程の差は確認できた。ここで、各課程内での現職教員と非現職教員で回答に差があるかをみていく。現職・非現職において差がみられたのは、2つの質問項目である。「大学院への期待」と「大学院でやってみたい(頑張りたい)こと」であった(表9, 表10)。教職大学院内では両質問項目において、現職は学術的要素を望んでおり、非現職教員は実践力を希望している。修士課程内でもこれらの質問事項では、非現職教員は実践力をあげている者が多い。「大学院への期待」と「大学院でやってみたい(頑張りたい)こと」の質問回答では、教職大学院、修士課程ともに似たような傾向にある。その理由として、現職は学校現場で触れることが困難な学術的要素を大学院へ期待しており、修士課程の非現職は教育実習以外の現場経験が乏しいので、大学院でも実践力の育成に期待していると考えられる。

(7) 沖縄県からの現職派遣教職員

沖縄県教育委員会から教職大学院、修士課程の両課程に研修制度の一環として、大学院派遣制度がある。この派遣では、沖縄県教育委員会へ沖縄県の現職の教員が大学院への進学を意思表示し、書類審査・面接などを経て、沖縄県教育委員会が認めた教職員が、1年間勤務校を離れ、有給で大学院で学修をするという制度である。沖縄県からの両院へ10名ずつの派遣が認められている。各院の10名の派遣枠があるのだが、大学院派遣制度を利用して進学した院生は、教職大学院で現職教員は10名、修士課程では6名存在する。

修士課程の新入生の人数が県の定員の10名を下回るということは、現職教員が修士課程より教職大学院を希望している可能性がある。沖縄県の教職員は学術的研究より、実践力を求めているかもしれない。これまでの考察の通り、教職大学院への志望動機の特徴として教職員としての実践力があげられる。そうであれば、この教職大学院の開院は沖縄県の教職員にとって朗報と言えよう。

5. まとめ

教職大学新入院生と修士課程新入院生の意識調査の結果、両者に共通しているものは「大学院への期待」として学術的要素、「2年後の得ているもの」は教育への視野がそれぞれトップであった。学術的要素が1位になっているのは、学校現場は忙しく研鑽を積むのが難しいことと、現場には学術的な相談をできる人材がかなり少ないと思われる。このことから、大学院での学修には学校現場では学ぶことのできない素養が存在する。ここに大学院の存在意義がある。現職教員にとって、教育現場で学べないもの

が存在する大学院は、重要なリカレント教育の場となっている。

教職大学院生と修士課程院生との意識の違いもある。まず、「課程選択の理由」である。教職大学院生は実践力を課程選択の動機として多い。他方、修士課程生は学術的要素が選択理由として1位となっている。入学前の動機にも差があることながら、院修了の「2年後に得ているもの」の2位3位は教職大学院で「学校運営力」「子ども理解」、修士課程の2位3位は「学術的研究能力」「教科経営力」と差がある。これらの2つの違いは新入院生が、これから自分が大学院で何を学んで、どのような能力が伸びるのか、成長する能力の希望領域をイメージしていると考えられる。教職大学院、修士課程の両課程の大学院生は、自分の将来のイメージを描いて大学院へ入学しているようだ。また、このイメージは教職へ就きたいという希望度にも差として表れており、教職への希望度は教職大学院が若干高い。教職大学院への入学を選択した院生は、研究能力より教師としての実践力にプライオリティを置いていると思われる。

一個人が大学院へ進学するときには何かしらの目的を持っており、この目的などに応じて進学先を選択している。琉球大学には現在、教育学研究科の大学院は二課程あるのだが、これは教育学研究科へ進学する個人にとっては、個人の目的に合った課程を選択できるというメリットがある。これらのことから、本年度開院された教職大学院は市民の希望に応じた選択肢を広げる高等教育機関となった。

今回の調査では質問紙のみから、二課程の新入院生の全体像について大まかに言及してきた。新入院生の意識の傾向は理解できても、詳細については明らかにできていない。質問の回答を見ると、すべての質問項目に対して一貫した回答をした院生もいる。例えば、修士課程院生に、課程選択理由で「研究をしたい、論文を書きたい」、大学院への期待では「論文指導」、大学院でやってみたいことは「研究・論文作成」と回答した院生がいた。今後、院生へのインタビューなどを通して、個人の思いと大学院の意義との関連について考えを深めることも大事なことである。

2016年4月に本学に開院した教職大学院は、実践力を身につけ、教職に就きたい(続けたい)と希望する市民にとって大きなキャリアアップの場になることが予想される。またそれを望んでいる教職員や教職希望者、教育関係者もいるだろう。このような教職大学院への眼差しに応える科目の提供、講義内容、指導教員の質の担保が今後、教職大学院へ求められる。

謝辞

本調査は入学間もなく、生活の変化や大学院講義の落ち着かない期間に教職大学院生・修士課程生の協力を得て行われた。忙しく何かと不安定な中での両院生のご協力に感謝します。

また、小田切忠人教授・萩野敦子教授・下地敏洋教授・城間園子准教授には、貴重な講義にアンケートの説明・回収にご協力いただき、ここに謝意を伝えます。

[註]

- 1) 西本裕輝は低学力と生活習慣の相関について指摘し、比嘉昌哉は就学支援制度の弱さを説明し、三村和則は教育に関わる家庭、地域や行政の状況に言及している。
詳しくは、西本裕輝、2012、『どうする「最下位」沖縄の学力』琉球新報社。
比嘉昌哉、2015、「沖縄県の就学援助制度の現状と課題 ―県内市町村教育委員会へのアンケート調査を通して―」沖縄国際大学『沖縄国際大学人間福祉研究』11(1): 1-23。
三村和則、2012、「沖縄の学力問題 ―授業以外に山積する課題：本土との地理的隔たりから生じる格差を埋めるための恒久的施策としての沖縄振興計画を―」『日本教科教育学会誌』34(4): 97-102。
- 2) 詳しくは、琉球大学、「大学院教育の目標」、琉球大学教育学部ホームページ、(2016年8月24日取得, http://www1.edu.u-ryukyu.ac.jp/master/master_top.html)
- 3) 詳しくは、琉球大学、「育成する人材像」、琉球大学大学院教育学研究科高度教育実践専攻(教職大学院)ホームページ、(2016年8月24日 取得, <http://www1.edu.u-ryukyu.ac.jp/kyoshoku/daigakuinnituite.html>)

[文献および URL]

- 飯田陸央・松本暢平・御手洗明佳, 2013, 「教職大学院生における学部新卒者の入学目的に関する研究 ―学生への質問紙調査から―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』: 13-23.
- 文部科学省, 2006, 「『教職大学院』制度の創設―教職課程改善のモデルとしての教員養成教育―」, 文部科学省ホームページ, (2016年6月20日取得, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337007.htm)
- 間瀬正次, 1997, 「現職教育の実情と問題点」『日本比較教育学紀要』3: 21-27.
- 澤田由美・土井英子・上山和子・金山時恵・杉本幸枝・木下香織・栗本一美・矢庭さゆり・古城幸子, 2012, 「看護職のキャリア形成と学位習得に関わる意向 第1報」『新見公立大学紀要』33: 73-80.
- 琉球大学, 2015, 「琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻設置計画に係る補正計画書」

